

困窮する子に居場所

困窮や虐待、ヤングケアラーなど、様々な問題を抱えた子供たちを対象にした学習支援、居場所作りを、活動の柱にしています。

きっかけは東日本大震災でした。ボランティアとしてたまたま参加した避難所の会議で、学校再開のめどが立たず、避難する子供たちの学習遅れが問題提起されました。自分が何とかしようと思い、震災の2週間後には任意団体を作り、その1週間後から、仙台市内の避難所の体育館のロビーを借りて、4人の小中学生に1対1で勉強を教えることから始めました。

初めは周囲にあまり歓迎されませんでした。子供たちからは「また来てね」と、好評でした。その後、新聞報道を受けて「うちの避難所でも

NPO法人「アスイク」代表理事 大橋 雄介さん 42

やってほしい」と多賀城、石巻、巨理まで活動の輪が広がりました。

3か月で、仮設住宅へと移動し、長期的な活動を見据え、場所を6か所に絞りました。集会所を借りて、週1回のペースで、ボランティアチームが訪問その頃になると、勉強はきっかけで、おしゃべりし

たり、ご飯を一緒に食べたり、そういう寄り添い方、居場所作りが変わっていききました。そうなるに関係性も持続し

ます。4年ほど活動し、仮設の閉鎖と同時に、困窮する子供の支援へと軸足を移しました。ずっと顔を合わせていると、家庭の状況が聞こえ、問題を抱えた子供が少なくあり



「困窮家庭向けに企業などから食料の寄付を受けています」と語る大橋さん

ません。また、被災者支援を受ける人と受けない人との心の分断があることを知りました。平時から、自治体などと連携できる地域のシステムを作っておくことが、いざという時に役に立つと思い、活動を続けてきました。

コロナ禍は試されました。困窮家庭が一気に増えました。が、段ボール1箱分の食料を月に約400世帯、のべ約4300世帯に対し、提供できました。これまでやってきた蓄積があったからこそ、迅速に、大規模に支援を行うことができたんです。

法人名の「アスイク」には「復興後の明日のための教育をやっつけよう」という思いを込めました。幼い頃から見守れるように、保育園事業にも取り組んでいます。子供たちが抱える生きづらさを拾い上げ、子供と社会をつなぐ役割を続けることは、災害時の備えにもなると思っています。(聞き手・川末弥生)